

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12605

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25560070

研究課題名(和文)大学の環境人材育成における現場体験に関する実践研究 レジリエンス育成とアンラーン

研究課題名(英文)A Practical Study on GENBA Experience in Environmental Human Resource Development of Universities - Resilience and Unlearning

研究代表者

二ノ宮リム さち(Ninomiya-Lim, Sachi)

東京農工大学・国際センター・特任准教授

研究者番号：90646499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：大学のESDとして実践が広がる環境人材育成の事例に対する批判的検討を通じ、特にそのなかで推進される「現場体験」の意義や課題と、現場体験にもとづく教育と専門的・科学的教育との衝突を乗り越えるために学生や教員が経る「アンラーン(unlearn)(学びほぐす・学び捨てる)」の過程を明らかにした。さらに、それが学生と地域のレジリエンス(変化に適応してストレスから速やかに回復する能力)の育成につながるという仮説にもとづき、グローバル教育としての多様な現場体験や学生交流の可能性を示し、今後の課題として「現場型グローバル人材育成」による大学のESD構築を提案した。

研究成果の概要(英文)：This study critically investigated environmental human resource development programs, which have been promoted as ESD in Japanese universities. The study had three focuses. First, it analyzed the possibilities of "GENBA (a site of actions or issues in Japanese) experience" for realizing ESD and issues to be considered for enhancing GENBA-experience-based learning. Second, it clarified the process of "unlearning" students and faculty need to go through to overcome the conflicts between GENBA experience and specialized/ scientific education. Third, it considered a hypothesis that such GENBA-experience-based education can develop resilience of students and communities, and proposed a plan to develop a model of "GENBA-based global education" as ESD in universities for developing resilience.

研究分野：環境教育、社会教育、国際教育、持続可能な開発のための教育(ESD)

キーワード：持続可能な開発のための教育(ESD) 大学教育 環境人材育成 現場体験 レジリエンス アンラーン
高等教育 環境教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 「国連・持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年(2005 年～)」にもとづき、高等教育における環境人材育成(環境問題の解決に貢献する人材育成)の取組が広がったが、こうした実践に対する批判的研究が圧倒的に不足していることが指摘されてきた(Nomura and Abe 2010)。今後の高等教育における ESD の効果的進展にそうした研究は不可欠であり、中でもこれら実践の多くが重視する「現場体験」について(例えば An et al. 2011)。その実際の効果と課題に関する批判的検討と対策提言が急がれた。

(2) 環境教育には、環境「についての(about)」「を通じた(through)」「のための(for)」教育という 3 つのアプローチがあり、効果的な環境教育が実現するためには 3 つ目のアプローチが不可欠であることが 1970 年代から論じられてきた(Fien 1993, Cook 2008)。この枠組みをもとに、環境人材育成における現場体験型教育のあり方を整理すると以下のとおりとなる。

- ・ 現場についての教育：環境問題や対策の現場に関する知識を伝達する教育
- ・ 現場を通じた教育：環境問題や対策の取組の現場を直接体験することを通じて、スキルや関心、意識を育てる教育
- ・ 現場のための教育：現場で環境問題を見だし解決するプロセスに参画することを通じて、持続可能な社会の実現に対する関心や倫理観、取組に参画し取組をリードするための力を育て、学習者と現場環境の双方に変容を促す教育

この枠組が現場体験型教育の検討に役立つと考えられた。

(3) 近年の気候変動やそれに伴う災害の頻発・激甚化により、災害から回復する力としての「レジリエンス」(変化によるリスクを防いだり、ストレスに適応して速やかに回復したりする能力(Haimes 2009))の概念が注目されてきた。生態学や心理学の分野で発展してきたレジリエンスの議論を土台として、ESD や環境教育が社会や人間のレジリエンス育成に貢献する重要性についても議論が始まりつつあった(Krasny・Lundholm・Plummer 2011)。大学の ESD の展開においても、レジリエンス育成への着目が重要となると考えられた。

(4) 本研究代表者が過去に実施してきた事例における学生や教員への聞き取りによると、制度や意識のなかで、講義・研究型教育と現場体験型教育が衝突し合う実態が見られた。これはつまり、前平(2008)の言う「『普遍的な』知を注入する教育」と「ローカルな知の学習」の衝突とも見ることができ、それを

乗り越えるためには、学習者が学習の場や自分自身の「個」有性の自覚を意識化し「『普遍的な』知をアンラーンする(これまで学んできたことを捨てる)こと」(前平 2008)が必要だと考えられた。こうした衝突とアンラーンの過程が、具体的事例においてどのように起こっている・いないか、課題は何か、アンラーンを促進する必要性を検討することが重要だと考えられた。

<引用文献>

An K, Akiyama T, Kim J, Hoshiko T, Furumai H, 2011, "The influence of field-oriented environmental education on leadership development", *Procedia Social and Behavioral Sciences* 15 (2011), 1271-1275.

Cook, V. 2008, "The field as a "pedagogical resource"? A critical analysis of students' affective engagement with the field environment", *Environmental Education Research*, 14 (5), 507-517.

Fien, J., 1993, *Education for the environment: Critical curriculum theorizing and environmental education*, Deakin University Press, Melbourne, Australia.

Haimes, Y.Y. 2009. On the Definition of Resilience in Systems. *Risk Analysis* Vol. 29, No. 4. 498-501.

Krasny M., Lundholm C. and Plummer R., 2011, *Resilience in Social-Ecological Systems: The Role of Learning and Education*, Routledge, London and New York.

前平泰志, 2008, 「序 <ローカルな知>の可能性」日本社会教育学会編『<ローカルな知>の可能性:もうひとつの生涯学習を求めて』東洋館出版社, 9-23.

Nomura, K. and Abe, O., 2010, "Higher Education for Sustainable Development in Japan: Policy and Progress", *International Journal of Sustainability in Higher Education*, 11 (2), 120-129.

2. 研究の目的

本研究は、上記背景にもとづき、近年大学の ESD として実践が広がった環境人材育成について、その多くで推進されている現場体験に焦点を当て、事例を批判的に検討し、意義と課題を明らかにすることを目的とした。特に、現場体験を、現場「についての」「を通じた」教育に留まらず、現場「のための」

教育へ発展させることの意義と課題を、事例における実態から検討することとした。

そのなかで、「現場体験のための教育」と専門的・科学的教育との衝突や、それを乗り越えるために学生や教員が経る「アンラーン（unlearn）」の過程に着目し、こうした衝突とアンラーンの過程が、具体的事例においてどのように起こっている・いないか、課題は何か、アンラーンを促進する必要性を検討し、その具体策を提案することを目指した。

さらに、そうした現場体験にもとづく教育が学生と地域のレジリアンス（変化に適応してストレスから速やかに回復する能力）育成に貢献するという仮説について、その妥当性と実態を事例において検討することとした。

これらを通じ、大学のESD全般における「現場体験」の意義と課題を議論するための枠組を提示することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 文献レビュー：大学におけるESDとしての環境人材育成において、現場体験がどのような意義と課題を持つかという観点から、「高等教育の環境教育・環境人材育成・ESD」「現場（と教育・学習）」「体験（経験）教育（学習）」「レジリアンス」「知のあり方（ローカルな知とアンラーン）」等のテーマに関して、多様な領域における先行研究を検討し、議論の枠組を形成した。

(2) 環境人材育成事業事例に関する報告書・資料等の調査・分析：ESDの10年における重点的取組の一つとされた文部科学省「戦略的環境リーダー育成拠点形成事業」について、各実施大学の報告書や発表資料等から、実施体制や教育内容におけるESDとしての可能性と課題を分析した。

(3) 上記事業における実践事例の参与観察と関係者への聞き取り・分析：上記事業のもと東京農工大学が実施した環境人材育成プログラムにおいて、教員（コーディネーター）として関わる立場から参与観察を実施した。また、関係教員、学生・修了生に対する半構造化インタビューにより、当該実践における「現場体験」の意義（レジリアンスの育成を含む）や課題について、実際の経験に基づく見解等を聞き取った。また、「現場のための教育」と専門的・科学的教育との衝突や、それを乗り越える「アンラーン」のプロセスが、実際にどのように起こっている・いないか、課題は何かといった点を明らかにするため、既存の学位取得に向けた教育・研究とプログラムにおける現場体験の関連性、対立・両立等の状況等について聞き取った。

発言等のデータはコーディングと分類化によって分析し、「現場体験」の意義と課題に関する考え方や視点を抽出・整理した。特に、「現場のための教育」を通じたレジリアンス育成、そのなかで重要な意味をもつロー

カルな知と普遍的な知との衝突、それを乗り越えるアンラーンの過程に着目しつつ、分析結果を検討した。

(4) 研究経過および成果の発表：以上の研究活動における経過や成果について、各種学会・研究会等での報告や学会誌・業界誌等への論文掲載により発表し、他の研究者や実践者との意見交換を行い、研究の進展に反映させた。

なお、本研究代表者は、研究対象事例に教員（コーディネーター）として参画した立場から、本研究を「実践の現場において実践者とともに課題を共同で探求し、研究成果を共有することをつうじて、研究者もまた問題の解決にむけて実践の担い手となり、現場との関係性を発展させていく（佐藤ほか2005）」プロセスとしての「アクション・リサーチ」として遂行した。随時、発見を実践に返し、実践を省みながら研究に反映させるとともに、単なる成果報告に陥らないよう、批判的視点を常に意識した。

<引用文献>

佐藤一子・森本扶・新藤浩伸・北田佳子・丸山啓史, 2005, 「アクション・リサーチと教育研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』44, 321-347.

4. 研究成果

本研究を通じて、最終的に、以下の成果を達成することができた。

(1) 大学の環境人材育成を通じたESDの可能性と課題の提示：「国連ESDの10年」における重点的取組とされた文部科学省「戦略的環境リーダー育成拠点形成事業」について、各実施大学の実践を横断的に検証し、実施体制や教育内容におけるESDとしての可能性と課題を提示した。

(2) 大学のESDとしての環境人材育成における「現場体験」と「アンラーン」の意義と課題の提示：「現場（と教育・学習）」「体験（経験）教育（学習）」「レジリアンス」「知のあり方（ローカルな知とアンラーン）」等の視点から先行研究を検討し構築した枠組をもとに、上記事業における実施大学の教員・学生を対象に聞き取りを実施し、「現場体験」の意義や課題と「アンラーン」のプロセスについて検討し、求められる対応を提案した。

(3) 大学のESDとしての「現場体験」を通じたレジリアンス育成に関する可能性と課題の提示：大学教育に「現場体験」を組み込み「アンラーン」を促すことで学生と地域の「レジリアンス」が育成されるという仮説を、学生・修了生への聞き取りから検証した。その

中から、特にグローバル教育としての多様な現場体験や学生交流の可能性が浮かび上がり、今後の課題として「現場型グローバル人材育成」による大学のESD構築を目指すことを計画した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

二ノ宮リムさち・阿部治, 2015, 「国連・持続可能な開発のための教育の10年(DESDE)を通じた国内の環境教育研究・実践における成果と今後の課題」『環境教育』24(3), 18-31.(査読あり)
http://doi.org/10.5647/jspee.24.3_18

二ノ宮リムさち, 2014, 「大学におけるESD推進の可能性と課題 - 『戦略的環境リーダー育成拠点形成事業』の検証から - 」『環境教育』24(2), 3-16.(査読あり)
http://doi.org/10.5647/jspee.24.2_3

二ノ宮リムさち, 2014, 「ESDとしての『現場』体験の可能性 - 『文脈』の視点から論じる『学ぶこと』と『生きること』の結合」『自然体験学習実践研究』2(1), 33-56.(査読あり)

二ノ宮リムさち, 2014, 「東京農工大学大学院における現場立脚型環境リーダー育成」『社会教育学研究』50(1), 56-58.(査読なし)

二ノ宮リムさち, 2013, 「大学の環境人材育成における『現場のための教育』の可能性と課題 - 持続可能な社会づくりへ向けた大学院教育を実現する『現場体験』とは」『共生社会システム研究』第7巻, 137-157.(査読あり)

[学会発表](計6件)

二ノ宮リムさち, 「大学のグローバル教育と『現場体験』~レジリアンス育成の視点から」, 日本社会教育学会 第61回研究大会, 2014年9月27日, 福井大学(福井県・福井市).(口頭発表)

Sachi Ninomiya-Lim, 'University Education for Resilience and Sustainability - Field-experience and "Unlearning"', 日本環境教育学会第25回大会(国際部会発表), 2014年8月3日, 法政大学(東京都・千代田区)(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 「国際化する大学院における専門教育と現場体験の関係性『現場のための教育』を実現する『ローカルな知』

と『unlearn』」, 日本社会教育学会 第60回研究大会, 2013年9月28日, 東京学芸大学(東京都・小金井市).(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 「大学院教育における『現場体験』の意義と課題: 環境人材育成事例からESDとしての『現場のための教育』を考える」, 日本環境教育学会第24回大会, 2013年7月7日, びわこ成蹊スポーツ大学(滋賀県・大津市).(口頭発表)

Sachi Ninomiya-Lim, 'Addressing Contexts for Students in University's International EE Programs: Experience of Japanese Universities', World Environmental Education Congress, 2013年6月13日, マラケシュ(モロッコ).(口頭発表)

二ノ宮リムさち, 「東京農工大学大学院における現場立脚型環境リーダー育成~『環境リーダー育成におけるESD・学びの組織』と『ESD・学びの組織者としての環境リーダーの育成』を実現する現場体験」, 日本社会教育学会六月集会, 2013年6月8日, 筑波大学(茨城県・つくば市).(招待講演)

[図書](計2件)

二ノ宮リムさち・森良(編著), 2014 『ESDの授業・プログラムづくり』, 非営利活動法人エコ・コミュニケーションセンター, 35頁.

二ノ宮リムさち, 2014, 『高等教育機関における持続可能な開発のための教育(ESD)に関する研究 国際環境人材育成事業の批判的検討』, 東京農工大学連合農学研究科博士課程提出学位論文, 東京農工大学, 137頁.

6. 研究組織

(1)研究代表者

二ノ宮リム さち

(NINOMIYA-LIM, Sachi)

東京農工大学・国際センター・特任准教授
研究者番号: 90646499